



## 2stage 関西学院グリークラブ 男声合唱組曲『尾崎喜八の詩から』

- I 冬野 作詩：尾崎喜八 作曲：多田武彦 指揮：広瀬康夫  
II 最後の雪に  
III 春愁 一ゆくりなく八木重吉の詩碑の立つ田舎を通過して—  
IV 天上沢  
V 牧場  
VI かけす

## 2stage

### 関西学院グリークラブ 曲解説

#### 男声合唱組曲『尾崎喜八の詩から』

##### 男声合唱組曲『尾崎喜八の詩から』誕生記

作曲家：多田武彦

私が京大の学生時代に京大男声合唱団の指揮を仰せつかり、清水脩先生作曲の男声合唱組曲「月光とピエロ」を歌ったのが縁で、爾後多くのご薫陶を賜った。諸般の事情で、映画監督への夢は消え一介の銀行員となったが、清水脩先生のご助言で、「一年一組曲の日曜作曲家」を目指した。相前後して、我が国合唱界の最高の権威者・林雄一郎先生や、銀行の仕事上でお会いできた山田耕筰先生からの数々のご教示と、永年にわたる「多くのア・カベラ男声合唱愛好のかたがた」のおかげで、1954年の処女作品「柳河風俗詩」以来、今日まで80以上の男声合唱組曲を世に出すことが出来た。

尤も、1963年に勤務先の支店の課長職になったとき、厳しい支店長から「音楽活動の禁止」を命ぜられ、作曲活動を中断した。1976年、融資先大会社に再建出向をした際、大人物の日銀出身の専務に励まされ作曲を再開、男声合唱組曲「雨」が出来た。

1971年から3年間、ドル・ショックや石油ショックなどで激務に追われ、再度作曲活動を中断、1974年には支店長として関西に単身赴任した。

この年に関西学院グリークラブから新曲の委嘱があった。私にとっては、まさに干天の慈雨。3年ぶりに懸命に書いたのが本日演奏される組曲「尾崎喜八の詩から」である。

清水先生や山田先生の薫陶の中に「日本の歌曲や合唱曲を作曲するときは、詩の中に、花鳥風月・春夏秋冬・喜怒哀楽・起承転結が巧みに組み込まれてあるものを選び、更に、詩の構築性が西洋音楽の構築性に適合したものを選び、その上で詩人の魂が汪溢している作品を選ぶこと」というのがあった。尾崎喜八先生の詩風は常に暖かく、人間味に溢れ、そして清廉である上に、日本の自然や万物の生きざまがきめ細かく描かれていた。盟友・北村協一氏の名解釈、関西学院グリークラブの名演によって、名初演が生まれ、爾後今日まで36年間、全国で愛唱され続けている。

林雄一郎先生は「学生の頃から名演奏の輸入レコードを何度も聴き、西洋音楽の構築性や装飾性を体得した。作曲家や指揮者は、楽譜だけを見ても駄目だ。名演奏の音源を何度も聴き、分析し、体得すること。管弦楽や合唱の演奏者は、指揮者の指示や指揮棒を見聞する前に、メンバーの発する凡ての音に聞き耳を立てて、一条乱れぬアンサンブルの原型を構築すること」と告げられた。現役四連やOB四連の演奏には、この薫陶が承継されている。だから、何時も、多くの聴衆が来てくれる。

演奏会のご成功と、今後ますますのご活躍を祈る。